

コスタリカにおける 開発事業



コスタリカ国花のラン

豊かな海岸—コスタリカ共和国

地図をひろげると、メキシコの南端から南米大陸に向けて、ちょうど、象の鼻のように伸びた細長い陸地が続いています。この南北両アメリカ大陸をつなぐ回廊が、いわゆる中央アメリカ地峡です。コスタリカは、中米諸国のいちばん南にあり、北はニカラグア、東はパナマと国境を接しています。

《現在のコスタリカ事情》

(2001年6月1日現在)

●コスタリカ共和国

1. 面積：51万km²
2. 人口：346万人（1997年・世界銀行統計）
3. 首都：サンホセ
4. 人種：スペイン系および原住民との混血95%、アフリカ系3%、原住民ほか2%
5. 言語：スペイン語
6. 宗教：カトリック（国教、ただし信教の自由あり）
7. 政体：共和制
8. 主要産業：農牧業（コーヒー、バナナ、牛肉、花卉、果実）
9. GNP：11,562百万ドル（1999年・中央銀行統計）
10. 一人当たりGNP：3,113ドル（1999年・中央銀行統計）
11. 主要援助国：（1998年）（1）オランダ（2）イギリス（3）デンマーク
12. 在留邦人数：335人（2000年4月現在）
13. 在日コスタリカ国人数：124人（1999年12月現在）

《当時のコスタリカ事情》

1. 面積：57万km²
2. 人口 211万人（1978年・国連推計）

〔1〕事業の目的

事業は、中米コスタリカ共和国の首都サンホセ州サンタアナ市に花卉園芸センターとして農場を建設し、カーネーションのウイルス・フリー苗（無菌苗）の培養と切花栽培、さらに事業地域での適性品種を選定することを目的としました。また、この過程を通じてウイルス・フリー苗育苗技術ならびに切花栽培の確立と同時に、その技術を周辺農民に普及し、コスタリカ共和国の花弁栽培技術の発展・向上と花卉産業の振興に寄与することを本開発事業の目的としていました。

当時、カーネーションは世界的にウイルスによる汚染が著しく、苗や切花の出荷にあたってウイルス・フリー苗が要求されていましたが、中南米においては、まだこの苗が作られていませんでした。事業開始3年を目途に、苗からの切花栽培を進め、それらの苗や切花を米国、中南米諸国、ヨーロッパへ輸出することを目標としました。また、事業の進展にともしない、観葉植物や多種にわたる花を栽培、販売することを計画したり、技術援助としてコスタリカ人にこれらの技術を普及したりと、日本や米国で研修を行いながら、同国の経済開発の一助たらんことを目指しました。

〔2〕事業の概要

1) サンタアナ第1農場

1978年、現地法人レイタク・コスタリカ株式会社を設立し、翌年、サンホセ州サンタアナ市コンセプトに約3.3haの農場を建設し、次の事業を行いました。

- ① カーネーションのウイルス・フリー苗の培養と切花栽培。
- ② カーネーションの新品種をアメリカ、ヨーロッパから導入。土壌試験、肥料試験、病害虫試験、温度、湿度などの適性品種を選定。
- ③ ①、②を通じて現地に適合するウイルス・フリー苗育苗技術ならびに切花栽培技術の確立を図る。
- ④ これらの技術を周辺農民に普及し、コスタリカの花弁栽培技術の発展・向上と、花卉産業の振興に寄与する。



サンタアナ農場の入口から奥を見る



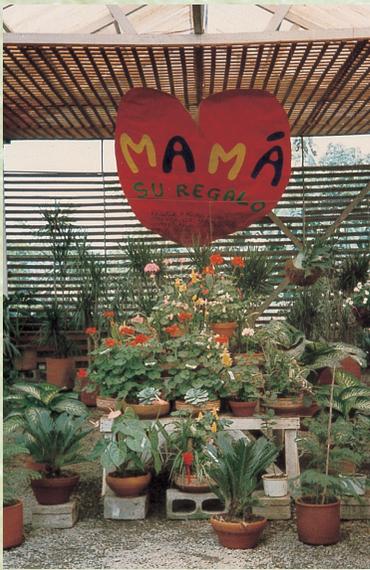
サンタアナ農場の入口にて（1986年）。
日本から来訪の大野氏（右）、白木氏（左）



サンタアナ農場に建てられた研究室



研究室ではカーネーションの無菌苗の研究を行った



サンタアナ農場における母の日の売店イベントの飾りつけ（1983年）



サンタアナ農場では、植物栽培のほか国内向け植物売店も営業していた

- ⑤ 企業としての事業運営を図るとともに、コスタリカの花弁栽培の発展・向上と花卉産業の振興に寄与することを目的としたガーデンセンターの開園。

2) アラフェラ第3農場

1982年、湿地帯で花卉栽培に適さなかったエレディア州オルケタ地区サラピキ第2農場を売却、アラフェラ市ロブレ地区に第3農場を建設。事業計画の一部変更を国際協力事業団へ申請し、次の事業を行いました。

- ① コスタリカ原産の観葉植物の生産。
- ② アメリカ、オランダ、ドイツ、イタリアへの葉物輸出事業。
- ③ 日本へのドラセナ（幸福の木）コンテナ輸出事業。

〔3〕事業の経過

1) レイタク・コスタリカ株式会社設立までの経過

1977年秋、当協会の藤村義朗理事が、米国サリナスの内田善一郎氏と三重県津市の赤塚充良氏より、中米コスタリカにおいて花の栽培が協会の事業として有望であるとの報告を受けました。1978年、協会の理事会で協議の結果、これを検討することとなり、長谷虎治副会長、藤村義朗理事、岩坂喜一理事等による調査団が現地に派遣されました。

その後、数次にわたる調査の結果、廣池千太郎会長の許可を得て、この事業の着手が始まり、外務省や農林省に諮り、国際協力事業団より融資を受けて事業を行うこととなりました。

1979年、事業団から官民合同によるコスタリカ花卉園芸基礎調査団が派遣され、細部にわたる調査が行われた結果、コスタリカにおける花卉栽培は非常に有望であるとの調査報告が提出されました。

この調査報告を受けて、当協会では、コスタリカ共和国で、農業、花卉栽培の技術援助を目的に、レイタク・コスタリカ（株）を設立することに決定しました。社長には長谷虎治氏、副社長に藤村義朗氏と赤塚充良氏、専務に岩坂喜一氏と内田善一郎氏が任命されました。資本金230万コロン（5,000万円

相当)、うち140.3万コロン(3,000万円相当)を当協会が出資、残額は後援団体モラロジー研究所維持員の有志者によって出資され、1979年9月5日に設立登記を完了しました。ここに本協会は、寄付行為第4条(目的)に記載するように、人材の育成と技術指導を通じて世界の平和、人類の安心と幸福に寄与することを目的として、道徳的指導もあわせ行い、日本とコスタリカ両国の親善と繁栄に努力することとなりました。

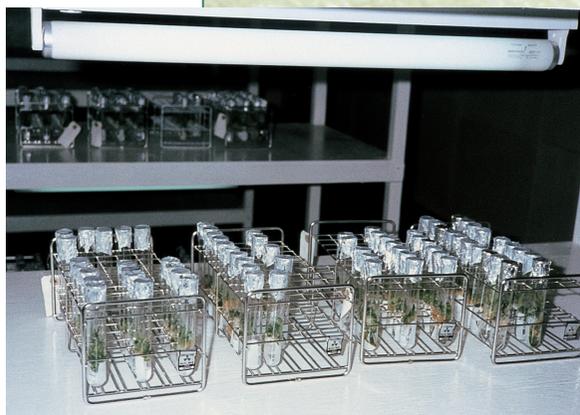
2) 花卉栽培事業の経過

現地法人レイタク・コスタリカ株式会社設立後、サンタアナ市に3haの農場用地を購入して、国際協力事業団に「花卉栽培試験事業」の申請を行い、融資の承認を得て現地法人の事業資金に充当してきました。1981年7月にレイタク・コスタリカ株式会社サンタアナ農場施設が完成し、事業を開始しました。当時、コスタリカと条件のよく似たコロンビアではすでにカーネーションの栽培が始まっており、世界最大の産地となっていました。年間を通じて無加温栽培が可能で、このカーネーションは日本へは年間100万本以上が空輸されました。この数字から考えて、コスタリカにおける花卉産業は、将来おおいにその発展が期待できると考えられました。また、これによる収益は、現地はもちろん、海外モラロジー開発の源泉になることも視野に入れ、日本や米国への輸出を目標に事業展開を進めました。

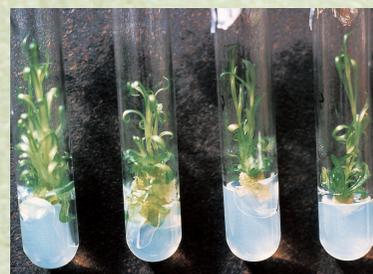
また、一方では、温室の一部にコスタリカ国内販売用の売店を整備するため、日本から輸入したサボテンやコスタリカ国内各所から仕入れた花卉園芸植物の栽培も開始し、7月25日に農場施設の完成と販売店のオープンを記念する開場式を行いました。式には日本からの役員、廣池英二郎夫妻、岩坂喜一、大野裕朗、永田定吉夫妻等を迎え、コスタリカ駐在の日本人や現地



日本とアメリカからの来訪者を迎えて、アラフェラ農場の事務所にて



カーネーションの無菌苗



カーネーションの無菌苗



売店がオープンした当時(1981年)

売店がオープンしたことを知らせる地元紙の広告



アラフェハラ農場

の著名人を招いてのセレモニーとなりました。

農場開場後も温室内の植物栽培を行い、さらに12月には隣接のアラフェハラ市に9 haの農場用地を購入して観葉植物の栽培も開始しました。この間、当協会からは用地購入資金を投じ、人材を派遣するとともに、国際協力事業団からは3年間にわたって毎年1名の専門家を派遣し

ていただき、中心事業であるカーネーションのウイルス・フリー苗の生産技術を確立することができました。

しかしながら、ウイルス・フリー苗の組織培養した母株にウイルスが発生してくる時間的要素が、コロンビアに比較してかなり早く、経費が増大し、経営上はきわめて不利でした。ウイルス・フリー苗の流通についても、世界的大産地である隣国コロンビアでは、カーネーション栽培以来10年を経過してウイルス病が発生し始め、ウイルス・フリー苗の自家生産を行うことになり、当初に計画したコロンビアへのウイルス・フリー苗の輸出の道が絶たれました。

切花栽培にあたっては、生産体制の遅延に加え、品質的に輸出商品として競争力を具備するにいたらず、当初計画したカーネーションの量産体制と輸出事業を断念し、全面的に観葉植物の栽培と輸出事業に計画を変更せざるを得ませんでした。カーネーションのウイルス・フリー苗の栽培適地としてすすめられていた第3農場用地の取得も、コスタリカの気候に適した植物の栽培を考え、観葉植物の栽培に適した土地にしばられていきました。そして、1982年後半からは、ドラセナ(幸福の木)を中心とした観葉植物の日本向け輸出事業を行うことになりました。

3) 観葉植物栽培事業の経過

ロブレ第3農場建設後は、サンタアナ第1農場との2農場体制を確立し、コスタリカ国内向け花卉栽培と販売、海外市場向け観葉植物の栽培と輸出を中心に事業を行ってきました。国内向けに温室でカーネーションやガーベラ、ポインセ

チアなどの植物を栽培し、それらの植物を売店で販売しました。また、コスタリカ産のドラセナ（幸福の木）を、当時、観葉植物がブームになっていた日本へ輸出できないかと考え、その道を切り開きました。このドラセナはサンタアナの土地で栽培しやすい植物であったので、カーネーションと比べて大量生産、大量輸出が可能でした。

コンテナによるドラセナの日本への輸出事業は大成功をおさめ、1984年には、これまで赤字が続いていたレイタク・コスタリカ（株）の決算が初めて黒字となるほどの収益をもたらしました。そして1986年には年間輸出高が100万ドルを突破し、コスタリカ国内における植物輸出高ベスト15にランク付けされるまでにいたりしました。また、これまでアメリカを中心にやってきた葉物輸出の市場拡大をめざし、ヨーロッパ各地への営業活動も行ってきました。その結果、農場内で生産した植物の品質が高く評価され、オランダ、ドイツ、イタリアなどへの輸出事業が展開されました。

このように現地原産または現地生産の植物を海外に輸出し外貨収入の道を開いたことは、現地法人設立の目的である「対外経済協力および技術援助」の上からも非常に意義深いことでありました。輸出事業が成功をおさめた後も、植物の品質管理、農場施設の充実、輸出市場の拡大、人材育成に力を入れて事業を推進してきました。

4) コスタリカにおける開発事業の中止

当協会は、現地法人レイタク・コスタリカ株式会社の設立以来、13年間にわたってコスタリカにてサンタアナ、アラフェラの2つの農場を経営し、花卉園芸植物の国内販売と日本への輸出販売を行い、一時期はコスタリカにおける植物輸出高ベスト15にランク付けされるにいたりしました。

しかし、レイタク・コスタリカ株式会社の事業は、継続的に日米欧に営業を続け、市場の開拓をする必要



アラフェラ農場



アラフェラ農場には倉庫、事務所のほか、輸出植物をパッキングし、ショッピング時まで保冷する冷蔵庫も完備していた

アラフェラ農場にて、コスタリカ駐在の小野大使夫妻（左から3人目と4人目）とともに





輸出用ポトスのベッド
(サンタアナ農場の第1温室にて)



サンタナ農場の従業員との語らい



ディフェンバギアの鉢上げ

がありました。そして、それ以上の事業展開のためには多額の再投資と人材の継続的派遣が必要でした。

そこで、1991年（平成3年）6月、当協会役員4名が現地を視察した結果、再投資によるそれ以上の事業の拡大は困難であり、あわせて13年間にわたって展開してきた事業の経過を踏まえて、協会がコスタリカ国へ進出した使命は達成されたと判断しました。出張した役員は帰国後、協会の理事会にて、レイタク・コスタリカ株式会社の事業を閉鎖し、農場用地と施設をコスタリカ国の機関へ寄贈することを提案し、承認されました。

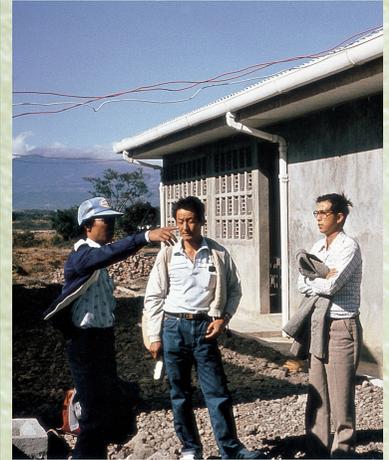
その後、在コスタリカ日本大使館に事情を説明し、ご指導を得て、コスタリカ国政府へ農場用地の寄贈を申し出て、サンタアナ農場はコスタリカ大学農学部の研究施設とし、アラフェラ農場はアラフェラ州の公的施設として使用していただくことになりました。その後、1991年11月7日にコスタリカ大学へ、11月9日にはアラフェラ州への贈呈式が現地にて開催され、コスタリカ大学ルイス・プリモ副学長、ガリタボニイジャ学長およびコスタリカ国アーノルド・ロペスエチャンディ副大統領から廣池幹堂会長あてに感謝状を頂きました。

以上のように、1978年9月にコスタリカの現地法人として設立されたレイタク・コスタリカ株式会社は、「対外経済協力および発展途上国への技術援助」という当協会の目的に沿った十分な成果を残したとして、1991年（平成3年）をもってレイタク・コスタリカ株式会社の事業を閉鎖し、当協会によるコスタリカでの事業を全面撤退することとなりました。

〔4〕 事業の成果

15年間にわたってコスタリカにおいて花卉栽培の開発事業を行ってまいりました。カーネーションの無菌苗栽培では、主な研究成果を残すことはできませんでしたが、観葉植物の輸出事業はコスタリカ国内での新たな形での輸出産業の育成に大きな成果を残すことができました。特に、観葉植物の輸出業においては、アメリカ、ヨーロッパに加えて、新しく日本への輸出販路を生み出し、コスタリカ国内の花弁産業に革命を起こしました。レイタク・コスタリカ(株)が、コスタリカ国内に新しい外貨収入の道を切り開いたといっても過言ではありません。その後、コスタリカ国内にも同じように輸出業を行う企業が続出したことから、ここに当協会の「人材の育成と技術指導」面の目的は達成されたと言ってよいでしょう。

コスタリカでの15年間は、コスタリカ国内での輸出産業の確立という大きな成果を残したと同時に、開発援助が抱えるジレンマにも直面した時期でもありました。そして、再度、援助のあり方を検討する機会が得られ、海外における事業は行わず、発展途上国へ派遣する人材の育成を活動の基盤とする方針が再度確認されることになりました。「開発援助の基本は人材育成である」という、援助のもっとも核となる、しかし、見落とされがちなのことを再確認できたことこそ、コスタリカにおける開発事業のもっとも大きな成果ではないでしょうか。



研究室西側



サンタアナ売店の内部



従業員の家に招待されて



アラフェラ農場にて鷺津氏(左)と
山本善三理事(右)(1989年6月)

貴重な20年間のかかわり

鷺津 邦男

1980年にコスタリカへの赴任が決まって以来、約20年間にわたって(財)麗澤海外開発協会とかかわってきました。その間、レイタク・コスタリカ(株)の事業運営中は2か年の駐在期間を含めて、アメリカを経由して中南米の地へ出かけていきました。最初は内田善一郎副社長がおられるサリナス・ギルロイ。そして、藤村義朗常務理事の会社のあるロサンゼルス、トーランス等、西海岸を経由してコスタリカに入り、モラロジー研究所ワシントン事務所が開設されたあとはワシントン、マイアミ経由で出張してきました。この間、北米大陸ばかりであった何回かの往復に際して海外経験を積むことのできたことは、私にとって貴重な経験であり、協会に対して感謝しています。

力の結集で物事を成しとげる

村上 明民

その日が良ければ……

のんびりした国であるという印象を持ちました。一部ではアメリカ的になろうとまねをしていたことが、すべてのことにおいて中途半端な結果をまねいていたようにも感じました。しかしながら、それはコスタリカの良さでもあり、悪さでもあり、コスタリカの人々にとって、それはそれで成功であるようでした。

あらゆる所で賃金の支払いがなく、それによる争いも多発していましたが、一般にはそれらのことは自分の生活に関係なければ知らぬ顔、という感じでした。その日、その日が良

ければすべて良しという感じが、一般的な人々の考え方のようでした。

一人ひとりの力の結集が大切

現地の労働者に仕事を指示する際、命令口調では労働者の動きが悪く、根気強く仕事をよく理解してもらうことによって、動きもよくなってきました。これは日本でもどこでも同じことで、言語、習慣等、違いはいろいろあっても、一人ひとりの力が結集できれば、物事をなすとげていくことは可能であると教えてもらいました。駐在当時、いろいろなことがありましたが、それなりに解決できたと思えるのは、自分たちだけの力でなく、やはり自分といっしょにやってきた現地の労働者の力があったからで、このことは忘れられません。

危険と背中合わせの体験を 関 哲夫

誘拐事件の勃発

コスタリカへ赴任後まもなく、松下電器の現地法人社長の小菅氏の誘拐事件が起きました。

当時、中南米でテロリストが資金獲得のために、身代金目的の誘拐事件が数件ありましたが、まさかコスタリカで起こるとは思ってもいませんでした。

テロリストは小菅社長を誘拐しようとしたのですが、向かいに住むコスタリカ人が、誘拐に気づきすぐに警察へ連絡をするとともに、テロリストに対し発砲したため、警察官も含めての銃撃戦になりました。小菅社長は、テロリストに撃たれたのか、流れ弾に当たったのかは不明のまま、数日後に亡くなりました。このような痛ましい事件があった後、私たちは二度とこのような事件が起こらないよう



成田空港にて（右端が関氏）

に、自分の身は自分で守らなくてはならないということを痛切に感じさせられました。

私は鷲津専務の後任として日本人会の監事の役を引き継ぎましたが、監事は安全委員会の委員長を兼任しているとのことで、日本人会ではテロに対する会合が何回もありました。ときには、橋爪日本大使と日本人会の役員数人で、当時のモンヘ大統領に会うこともありました。

「中南米のテロリストは、世論を味方につけるために、決して子供や女性は誘拐しない。誘拐するのは必ずトップに立つ社長クラスだ」と言われているのですが、日本人会の人々は、「子供を日本人学校へ行かせるには、警察の警備をつけてほしい」「そんなことをしたら、どこに日本人が住んでいるか分かるので、そっとしてほしい」など、いろいろなことを言われました。家族で食事に外出しても、日本人会の人々に会うと、勝手なことばかり言われまし



日本から輸入したサボテン

たが、結局、自分や家族の安全は自分で守ることでした。

コスタリカの警察はあてにならないという、笑い話のような本当の話を知りましたが、日本人が泥棒に入られたので警察に連絡し、現場検証に来た警察官が帰ったあとで、また、物がなくなっていたというくらい、警察は信用できない国でもありました。

その後、毎日家を出るときは、まず外の様子を見て、何か変わったことはないかと確認をしてガレージの扉を開けるのが当たり前になりました。日本で生活する現在では、いつも同じ時間に家を出て、同じ電車の同じ車両に乗り込む毎日です。コスタリカ時代を思い出して、せめて同じ時間の電車でも別の車両に乗ろうとするのですが、すぐに忘れてしまいます。

コスタリカでは、農場へ行く通勤路も毎日変えていましたが、一番心配したのは、テロリストよりもクリスマス前の銀

行へのお金の出し入れでした。農場では、労働者に毎週給与を支払います。余談ですが、ヘラルド・ビンズというコスタリカ人社員がいましたが、彼には、月2回の支払いでした。もう少しランクが上がると月1回の給料になるようです。

ところで、クリスマス前の小さな支店の銀行でも、警備員がライフルを持って立つようになります。泥棒も増える時期です。ですから、クリスマス前は、中南米の旅行は避けたほうがよいです。給料日は金曜日ですが、金曜日だけでなく、水曜日や木曜日にお金を引き出しに行き、時間もまちまちにしました。銀行への行き方もいろいろと考えて変えていました。高額なドルをコロン（コスタリカの貨幣）に両替したときは、ひったくりに遭わないように、数えたらすぐに必ずズボンのポケット数箇所へ入れるなどしていました。

不法侵入者との闘い

私が赴任した頃、太平洋のリモン港へ行く途中にあった「サラピキ農場」では、植物を何も栽培していませんでした。

初めてサラピキ農場へ行ったのは、日本から赤塚さんが来られたときで、奈良日本大使と鷺津専務と一緒にトヨタ・ランドクルーザーに乗り、名輪辰一郎さんの運転で悪路を1日ばかりで行ったことが記憶に残っています。そのときは、農場に「ドラセナ」（その後、赤塚さんが日本で「幸福の木」として売り出した観葉植物）が若干植えてあった程度で、管理人が一人で住んでいました。この管理人は、2～3か月に1度、私たちの仕事をしているサンタアナ農場へバスに乗って報告に来るという程度で、レイタク・コスタリカ株式会社では遊んでいる土地となっていました。

この土地に、いつ頃からか不法侵入者（プレカリスト）が、十数家族入り込み、農作物を栽培し、簡単な家まで建てて住みつくようになりました。このプレカリストをそのままにしておくと、プレカリストたちに土地を取られてしまいます。

そこで、私と現地社員であるヘラルド・ビンズ、名輪さん



サンタアナ売店内で。
左が関氏

の三人で状況視察のため、朝早くにサラピキ農場へ出かけました。そのときに、次のような出来事が起こりました。

サラピキ農場へは、昼頃に着きました。プレカリストたちは、女性と子供たちが農場の中にいたので、ヘラルド・ビンスが農場から荷物を持って出て行くように伝え、プレカリストは素直に農場から出ていきました。そこで、人がいなくなった簡単な家（藁や鉄板等）に、二度と住めないように火をつけました。

このときの、家が燃えているのを見たプレカリストの男たち（別の農場で働いていた）が、マチュタ（コスタリカ人が草を刈るのに用いる細長い板刀）を持って追いかけてきました。

このときは、さすがに殺されるのでは……と思い、名輪さんとすぐに車に飛び乗り逃げ出しました。しかし、大きな石を投げつけられて運転席の横のガラスが割られ、名輪さんは肩に怪我をしながらも、車を止めずに逃げてきました。

あのときに、車が止まったら、殺されてサラピキ農場に埋められていたかもしれないと思いました。その後は、サラピキ農場へは2度と行かず、この事件をきっかけに、何とかサラピキ農場を売却することができました。

このサラピキ農場は、コスタリカで国際協力事業団の融資が受けられないとのことで、観葉植物の栽培をするために取得し、私が赴任する前に何人もの日本の若い青年がドラセナを植え、川で水を浴び、雨水を飲料水にして生活した思い出のある農場でもありました。



サンタアナ農場内の売店用観葉植物栽培場

レイタクコスタリカの意義

廣池 英行

1) 海外における貢献とは、日本におけるメジャー（基準）を当てることではなく、その当事国のメジャーに当てて、そ

の貢献度を測るということです。例えば、1986年にレイタク・コスタリカが上げた100万ドルの年間輸出売上高は、日本からみれば1億5千万円（年商ベース）であるから微々たる額ですが、輸出する物の少ないコスタリカにとっては貿易収支の統計に影響するような大きなものであり、それは、当時のコスタリカ国内の反響や対応で証明されています。しかし日本においては、残念ながらその意味に理解を示す人々はあまりにも少ないといえます。

単純に、「5億円もつぎ込んでいるのだから1~2億円売ったって仕方がない」という見方では、海外貢献の本質を理解することは不可能でしょう。物・金を消費するのはたやすいことですが、全く新しい方法で無から有を作り出すことは至難の業だと思います。

2) コスタリカの観葉植物業界は、これまで主にアメリカの巨大資本種苗会社の苗場のひとつでした。レイタク・コスタリカは、生産業者自らが、アメリカ、ヨーロッパ、日本などのマーケットに乗り出して主体的に貿易を行うというスタイルの提示と実践を先駆けて行ったことに意義があります。つまり、国際市場における第一次産業という搾取されるサイドから、直接国際市場を主体的に開拓するという新しいビジネス・モデルの提示、実践、転換に大きな貢献をしたと言えます。このことは、最近来日したコスタリカの生産輸出業者のアルバロ・ロハス氏の次の言葉に表れていると思います。

「私どもは80年代の終わりに単なる生産者から生産・輸出業者に転向したが、これもレイタクの成功とその方法論を手本としたからだ。レイタクの事業はコスタリカに新しい輸出産業を生んだ大きな原動力になったといえる。是非、また戻って来て一緒にビジネスをしたいと思うので、検討してほしい」



派遣スタッフ。右から2人目が廣池氏。
左から3人目は村上明氏（1981年）